大学出版

2003.6 No.57

夏

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

フォトグラファーの四季――夏 ■ 堀口マモル ――表2

特集＊東アジアの比較出版文化

伝統中国における出版文化 ■ 井上進 ――2

近世九州の出版文化 ■ 中野三敏 ――6

韓国の大学出版部は今どこに立っているか ■ 朱弘均 ――10

明日の日本大学出版部協会 ■ 渡辺勲 ――14

科学する目 10 都市の生き物たち ■ 青木淳一 ――18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 30 国際子ども図書館 ――20

大学出版部ニュース ――22

AJUPオピニオン ――表3

日本大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

フォトグラファーの四季

夏 Verano

Help me! 自由を求めて

堀口 マモル

収監時の写真（ポラロイド）

忘れもしない一九八二年八月、ニューヨークでファッション広告写真スタジオのチーフアシスタントとして活動していた頃、ガールフレンドのエミーとプエルトリコで休暇を過ごし、その帰りに思わぬ災難？にあった事があります。

プエルトリコの空港で、搭乗口へ延びる長い行列に並んでいると、なんと、その先頭で全員のパスポートチェックをしているではありませんか。気づいたのは私達の直前。今更逃げられません。実は、私のアメリカ滞在ビザは二年前に失効しており、労働ビザを申請中だったのです。結局、アメリカ人の彼女は問題がありませんでしたが、私は不法滞在者として指紋と顔写真を撮られ、そのまま監獄へ。彼女は弁護士と相談するため、その夜のうちにニューヨークへ戻っていきました。

過去に同様の問題で捕まった日本人の友人は、ブルックリンで一般犯罪者と同じ監獄に投獄され、持ち込んだ現金を全て牢主に渡して身を守ってもらったとのこと。幸運にも私の場合は不法滞在者だけの監獄でした。ベッドが二〇程、囲いのないシャワーが五つ、便器が二つ、壁には様々な言語の落書きがあり、記念すべき日本人第一号として、名前を刻んでおきました。

一日で出獄できると思っていたのが、二日過ぎ三日が過ぎる頃、ふとこの小さな国の監獄にずっといるのではと不安になり、鉄格子のはまった窓から〝Help me!〟と書いた紙飛行機を飛ばしたりしました。外に見えるあの道を歩きたい、ただ自由が欲しいと夢見続けた四日目、ようやく彼女から航空チケットが届いて釈放。といっても手錠をはめられたまま護送車で空港へ。その後、行き先も知らされないまま飛行機に乗せられ、着いた先はメキシコのアカプルコでした。しかしビザのない私は、すぐにはニューヨークに戻れず、しばらくメキシコで過ごすことになったのです。

一ヶ月半後、なんとかニューヨークに戻ることができた私は、監獄の中で常に考えていた自由であることの大切さ、また、その自由の中で創作活動をする喜びを求めて、ニューヨークに自分のスタジオを持つことを決意。一年半程の間、昼は写真の仕事、夜は日本食レストランのウエイターを休まず続け、約二万ドルの資金を作り、一九八四年、遂に、西二七丁目に写真スタジオMA STUDIOを設立したのです。アメリカに渡って六年目の夏の事でした。

（ホリグチ・マモル／写真家）

・・・・・・・・・・・・ *・・・・・・・・・・・・

筆者の作品は以下のホームページで紹介されています。http://www.mamoruh.com

特集

東アジアの比較出版文化

日本の出版が「いまあるような出版」となって、どのくらい経つのでしょうか。電算植字となって二〇年、西欧をモデルとした出版では百数十年、紙を束ねた書籍形態の大量流通は近世から、など、出版の歴史を遡り、またそれを近隣諸国と比較してみたとき、「出版」という形態は、私たちがふだん考えている以上に変化を繰り返してきたことがわかります。

「出版産業の行き詰まり」がささやかれ、現在とは違う出版モデルの構築が急務とされる昨今、「かつていまとは別であったし、これからも別でありうる」出版のすがたの一端を、伝統中国の出版の先進性とその限界から、また高い自律性をもち「地方出版」ではくくれない高度な展開をみせた近世の九州から、日本とよく似ているようで微妙な差異をもつ韓国の大学出版から、垣間見てみたいと思います。

伝統中国における出版文化

井上　進（名古屋大学大学院文学研究科教授）

伝統中国、すなわち前近代中国の出版文化といえば、まっさきに語るべきはその先進性、少なくとも世界の他のどの国におけるよりも、長く豊かな歴史をもっている、ということであろう。出版という言葉を印刷物の発行と解すなら、印刷術を世界に先駆けて発明し、実用化したのは中国であった。中国では十世紀、宋代から印刷本の時代に入り、営利出版も盛んに行なわれて書籍が社会に「普及」した、などとは一般的な中国史の概説書にも往々記されるところだし、じっさいそのようなことを述べたとしても、それは格別誤りというわけではない。

このことにちなみ、私は昨年公刊した小著（『中国出版文化史』名古屋大学出版会）の序において、友人が経験したこんなエピソードを紹介した。米国のある大学でご自慢の蔵書を展示する催しがあり、それを見に行ってみると、十五世紀後半に出版されたインキュナブラ（欧州における最初期印刷本、揺籃期本）が麗々しく並べられている。すると一緒にいた中国人がぼそり、「要は明版だろう？」と言った、というものである。十五世紀後半というと、中国では明代中期の成化、弘治年間くらい、もとよりこのころの本となれば、中国でも古版、善本として扱われはするが、大騒ぎするほどのことはない。宋元版に較べれば、たかだか明版にすぎぬからである。ところがこの話を読んだある英国人女性は、これまた私の友人である日本人の夫に向かって、「馬鹿にしている」と憤慨されたそうである。西欧人ないし西欧文化を馬鹿にするつもりなど、私にはむろん微塵もないのであるが、この話にはそのような誤解を生む毒が、やはりいくぶんかは含まれているのだろう。

毒があろうとなかろうと、たしかにインキュナブラは明版である。これは否定しがたい事実であり、中国の出版文化がもっていた先進性を端的に表すものである。もっとも理屈と膏薬はどこにでも貼りつくというやつで、中国の先進性などと言うと、何かしら難癖をつけ、それは現象とし

ては優れているかに見えるけれど、そんな外面にさしたる意味はなく、本質的には劣っている、などという話がたちまち出てくる、かつてはたしかにそうであったし、今でもそうした傾向が、完全に払拭されているとは言いがたい。

たとえばヘーゲルは、中国人ののこした厖大な歴史叙述、世界に類を見ない質と量の史学遺産を、何の理屈もなくただ書いただけ、「世界精神」から見ればもっとも幼稚な、即自的な段階のものにすぎぬといい、今でもヘロドトスが「歴史の父」、「西欧にとっての」ではなく、普遍的な意味で「歴史の父」であったりするのがこれである。しかも驚くべきことに、こうした偏見は西欧人のみならず、西欧の知の取次店、ないし総代理店といった趣きの日本人にも共有されていて、グーテンベルグによる「印刷術の発明」などという神話が、今でもけっこうまかり通っている。

そうした人々に中国の印刷術をもち出せば、それは木版印刷であって活版印刷ではないと言い、ならばその活版印刷も中国で、宋代の十一世紀に発明されたのだと説明すれば、それは金属活字ではないと言い、実のところ金属活字も十三世紀の朝鮮で発明されており、十四世紀の金属活字本になれば、実物さえ現存していると言えば、しかしそれはプレス機を用いたものではないと納得せず、要するにそれはヨーロッパでないから駄目、とでも言いたげなのである。二千年にわたって知の規範を外に求めつづけている――じっさいそれは我々の宿命である――日本人というのは、ちょっと油断するとかくまで奴隷的になれるのだと、いささか感慨これに繋らざるをえない。

中国で活版印刷がさほど行なわれなかったのは、紛れもない事実である。しかしそれは、一昔前の和文タイプが欧文タイプほど便利でなく、普及もしなかったのと同じで、漢字の使用という問題があったこと、その上更に紙型の技術がないとなると、大量複製という印刷の根本目的にとって、活版の有効性はついに木版に及ばないためであった。したがって今日、朝鮮（韓国・朝鮮）人の学者が誇らしげに語る高麗、朝鮮王朝の活版印刷文化についても、一面ではたしかに誇るに値するものであるのだが、もう一面では、書籍需要の少なさ、ほとんど賜与専門の少部数出版で、書物の供給がだいたい間に合ったという、そういう事情も考慮されてしかるべきなのである。わが国でも十七世紀前半、ほぼ慶長から寛永にかけて、朝鮮活字版に倣った活版印刷がやや盛んになったのは、この時期になって書籍需要が大きく伸び、もはや手写しだけでは間に合わなくなっていたと同時に、その需要はなお限られたもので、木版より速く出版できはするものの、少部数印刷にしか適さない活版の方が、むしろ都合よかったからに他ならない。

中国の出版文化がたどった長い歴史、そしてその豊かな内容を具体的に述べるのは、この小文のよくするところではない。よってここでは、かつてあれほど明らかな先進性

を示した中国の出版文化が、どのようにしてその輝きを失うに至ったのか、という問題だけを少し考えておきたい。

印刷術と並ぶ中国の世界史的大発明、紙、羅針盤、火薬は、それが西欧にもたらされるや、たちまちにして「近代」を生み出す巨大な動力となった。羅針盤のない大航海時代とか、火薬のない西欧の軍事力などというのは、語るもナンセンスである。同様にして印刷術も、西欧においては「近代」を準備するきわめて強力な道具となった。フランスの啓蒙思想家コンドルセは、印刷術こそは（西欧）諸国の教育を「あらゆる政治的、宗教的束縛から解放」した、とまで言っている。

実のところ、印刷という技術がイデオロギーを一変させた、などというのははなはだしい飛躍であって、それはちょうど「インターネットが世界を変える」といったフレーズみたいなもの、とてもそのまま鵜呑みにするわけにはいかない。しかし印刷術が「西洋文明がかつて手にしたうちで最も強力な道具のひとつ、……西洋人がこうして世界を支配するための最も有効な手段のひとつ」となった（リュシアン・フェーブル『書物の出現』序、長谷川輝夫訳）のは、たぶん間違いのないところであろう。ならば西欧においては「近代」創出の「最も強力な道具のひとつ、……最も有効な手段のひとつ」となった印刷術は、伝統中国において、なぜそうした作用を発揮しえなかったのか。

大きな可能性を秘める道具が、実際にどれほどの作用を発揮しうるかは、その使い手の問題である。中国において印刷術を出現させ、その利用者となったのは「士大夫」であった。士大夫とは「なによりもまず、知識階級であ」り、「いま少し周到にいえば、その儒教的教養（それは同時に道徳的能力をも意味する）のゆえに、その十全なあり方としては科挙を通過して為政者（官僚）となるべき者と期待されるような、そのような人々」（島田虔次）である。

彼ら士大夫は、かつてのきわめて閉鎖的な貴族ではなく、社会に対して開かれた選良、知的＝道徳的能力という普遍的尺度によって、全人類（と想定された範囲）から選び抜かれたエリートと自負していたがゆえに、かつての貴族のごとく、書籍ないし文化を極端に狭い範囲で独占しようとはしなかった。今や成功への階段は万人に開放され、そしてすでに発明されていた印刷術は、いよいよ本格的に実用化されることとなる。

理念として言えば、彼らはたしかに開かれた支配階級であった。しかしながら、既に特権を享受するようになった彼らは、自らの特権を保証するゆえん、すなわち知的優越性をわざわざ平準化しようとはしない。かくて大量複製技術たる印刷術は、文化の俗化を嫌う知的選良から、往々にしてひどく冷淡な言葉で批評された。写本の時代、人々の学問はしっかりしており、そのテキストもよいものであったのに、出版が盛んになってからはすっかり駄目になってしまった、とは十二世紀の学者、そして大蔵書家でもあっ

たある人の述べるところだが、こうした発言は決して彼だけの、また宋代だけのものではなく、前近代を通じ、一貫して堂々たる正論でありつづけた。

書籍は士大夫なるものの開放性ゆえに、社会に開放されて印刷本を本格的に登場させたのであるが、同時に士大夫がもつ閉鎖性は、その開放の徹底化を許さなかった。書籍の、特に印刷本の「普及」は、宋代はおろか明代の十四、五世紀になっても一向に実現せず、書籍世界における写本の地位は、相変わらず重要なものでありつづける。考えてみれば、これはわが国でも似たようなものであって、平安より室町にかけて、仏典その他の典籍はまま出版されていたけれど、当時はまったく写本の時代というべきだし、真正の印刷本時代に入った江戸時代でも、世に行なわれる書物はすべて印刷本になった、などと言えば事実を去ること十万八千里、とんでもない間違いである。

印刷本が写本を圧倒し、書物といえばほぼ印刷本となるのは明末、十六世紀後半くらいからである。この明末という時代は、雅なる士（士大夫）ではない、俗なる庶（平民）がしだいに台頭し、伝統的価値観が激しく動揺した時代であった。そして士による文化の独占が破れはじめたまさにその時、印刷術に対する新しい評価が登場しはじめる。古代の竹簡の書物と今の印刷本を較べれば、その優劣は「十百倍どころか千万倍の差」、少なくともこの点について言えば、現代人は古代人よりはるかに幸福である。こうした異論は、むろん少数の人の唱えるところでしかなかったけれど、必ずしも孤立的とは言えず、明末数十年の間には、明らかにひとつの潮流になろうとしていた。

だがにもかかわらず、こうした人々の中から、コンドルセはついに登場しなかった。問題を極大化して言うなら、中国はついに自力で「近代」にたどりつけなかったからである。ではなぜそうなったのか。これは大きな、回答の難しい問題であって、ここで自らの考えを述べる用意は遺憾ながらない。ただコンドルセは登場しなくても、その一世代、ないし数世代前くらいには当たりそうな人々が登場していること、これはやはり注目すべき事実であるし、明末の出版文化がはらんでいた可能性の、その一端を示す現象でもあるだろう。

近世九州の出版文化

中野三敏（福岡大学人文学部教授）

室町期まで、ごく特殊な領域でしか行なわれていなかった整版印刷による出版が、近世に入って朝鮮式と西洋式の活字印刷技術の両方がもたらされたことにより一気に活発化し、未曽有の出版文化の時代を迎えることになる経緯は、既に説き古されたことでもあるのでここには略す。

ただし、盛況を極めた所謂〝古活字版〟が、五十年ほどを経て寛永期に入ると、再び整版印刷に戻って、以来幕末・明治期までの二百年間、それが木版印刷の主流となるについては、従来その交代の理由として、今一つ説得力のある説明はなかったように思う。

私見は単純なことで、要するに寛永期を迎えて、営業としての出版業が完全に定着したためという事に尽きるように思う。すなわち出版が営業として成り立つためには、出来る限り簡単に増刷が可能でなければならぬのは、今も昔もそれほど変りはない。その点で、紙型を残すという技術が開発されない限り、活字版の増刷は、その度に初めから活字を組みあげねばならず、結局初版と同じだけの手間がかかってしまう。その点整版は、一度版を彫り上げてしまえば、その板木を残すことによってあとは刷り手間だけでいくらでも増刷が出来る。そのため、営業としての出版となれば、再度整版へ逆戻りするのは当然であった。活字印刷はこの時点ではまだ営業には不向きな方法だったのである。したがって、寛永期を迎えて、本当の意味での出版文化が定着することになったと考えられる。

そうなった上で、我国の出版界には今一つ大きな特色があったように思う。それは同時代の諸外国の出版状況と比較した時、出版物の内容の広範囲なことと、その量の多さという点に求め得るのではなかろうか。ただし、外国の事情を精査した上での発言ではないので、今は、憶説として記すにとどめるが、とまれ我国近世の出版は、その初発の時点からしてすでに所謂〝物の本〟から〝草子〟に至るまで、すなわち格調高い学術的、芸術的な書物から、極めて

通俗的な教訓書や慰み本に至るまで、とにかく幅広く、多種かつ大量な出版が志されていた。それを可能にした最大の理由は、おそらく用紙としての和紙というものの、大量かつ廉価な生産がそれを支えたといえようが、ともかくこうした条件が、近世の出版文化を逸早く成立させたことは疑えない。

出版は、初めは京、やがては江戸・大坂と三都を中心に行なわれ、十八世紀初頭、享保の改革による法令の整備とともに一層の発展を見せて、名古屋を加えた四都に広がり、寛政を過ぎた十九世紀に入るとほとんど全土に渉るようになり、九州でも盛んな出版活動が認められるようになる。

近世の日本は、いわば合衆国のようなもので、三百諸侯といわれた諸藩それぞれが一国を構え、法制・経済・文教・殖産・治水等、あらゆる局面にそれぞれ独立した施策を行なうとともに、参覲交代の制度によって常に中央との緊密な連携が図られ、各藩ともに上層部の文化水準は極めて均一なレベルが保たれていた。したがって出版文化に関しては上層に関する限り、初期の段階から三都の生産物が十分に行きわたって不足はなかったと思われるが、次第に下層の需要が高まるにつれ、各藩内においてその需要に応じる必要性が生じ、やがて出版そのものが根づくようになる。

そもそも出版という業種は、木版印刷の場合も、本格的に行なう時は極めて大きな資本と熟練した業務とが必要であり、それは三都の業者の独占的な営業とならざるを得なかった。したがって、ある地方の藩の中枢部において何等かの出版の必要が生じた場合、資金は藩が負担し、業務は三都の大板元に委託して行なうことで、十分にその需要に応えていた筈である。たとえば水戸藩や黒田藩などは、京都の小川柳枝軒という板元に委託して、藩内の有名儒者の著述を刊行させており、信越地方の諸藩では、地の利もあって尾張名古屋の永楽屋や風月といった大板元に委託することが多かったが、その類を藩版と称しているのは、一見、各藩による出版物として、地方で刊行された物の如くに認識されかねないが、こうしたものは実際には中央三都もしくは四都の出版として扱うべきは言うまでもない。

名実ともに地方版といい得る出版物は、その初めは各地方都市に散在した、看板や欄間、掲額、あるいは絵馬などの木彫職人、あるいは案内図や引札など一枚刷りの刷り物を手がける彫り師などが、次第に複数枚の刷り物をまとめて一冊物とするなどの段階を経て、板元として成長していったものかと思われる。したがってその製品そのものは、三都大板元の整美された出版物とは違って、彫りも刷りも極めて粗雑であり、何よりも用墨の製法や調合に未熟さが露呈されたものが多く、刷り上がりは各所に浚え残しの痕跡が点在し、刷りムラが出来るなど、御世辞にも精巧、整美とは言い難い版面を呈するものが多く、総括して〝田舎版〟という蔑称を以て呼ばれていた。しかし一端その内容を見ると、凶荒時の救済を志した救荒の手引き書や、安産の方

法を教え、種蒔き、蚕育の実際を指導し、孝行者の顕賞を行うなど、地方の民生に密着した実用有益の懇篤な出版物がほとんどであり、有志者大勢の出資を募るなど、その出版の心意気は三都の大板元には見られない真実味を濃くするものである所に、その意義があるともいうべきであろう。

以下に、その九州における実際の出版物のあれこれを紹介してみる。

薩摩版に、日向版や大内版といった出版物は近世以前に遡って、いわば三都に先駆けての出版であり、以下に触れるものとは趣きを異にするのでここには略す。

九州の出版物として最も完成の域に達したものは天領の長崎における出版物であろう。ただしここでもキリシタン版は除外視して、この初発は専ら絵図や版画といった一枚物の刊行にあり、用途は土地柄から多分に土産物といった性質を持つ物であったらしい。古く正保二（一六四五）年刊とする「万国人物図」が「於肥州彼杵郡長崎津開板」の刊記をもつが、これが本当に長崎で刊行されたものかどうかははなはだ疑問視される。正確に長崎版と認定し得るのは、正徳・享保（一七一一～一七三五）頃の板とされる竹寿軒中村惣三郎版の長崎図あたりからで、その後、豊昌屋・針屋・文錦堂・大和屋など十数軒に及ぶ板元が専ら長崎図の他に蘭人や唐人の彩色刷り風俗版画を製作販売して幕末を迎え、嘉永年間（一八四八～一八五三）、三都に先駆けて通詞本木昌造による金属活字製作に端を発した出島版とよばれる西洋式金属活字印刷が始まると、早速に薩摩藩でも、当時字彫り板木師の名人と称された江戸の木村嘉平を起用して活字鋳造を試すなど、いわゆる近代活版印刷の黎明を迎える事になるが、このあたりの事はすでに専書も多く、詳細はそちらへ譲るべきかと思う。とまれ近代活版印刷の波は九州に起こって、やがて中央へと向かったことは特筆に価しよう。それとは別に天保年間（一八三〇～一八四三）には立身屋万兵衛という書肆が存在して、中島広足の著述などを中心にした出版活動を行なっており、伝統的な地図や版画とは異なる冊子型の書籍刊行に従事しているのは注目すべきである。

長崎についでは細川藩肥後熊本から菊池地方に早い動きが見られ、こちらは宝暦頃（一七五一～一七六一）からの活動が確かめられるが、まだその実態は調査中で、確実な報告が出来るような階段ではない。後考に俟ちたいと思う。

ついで福岡藩では筑前博多の薬院という所で「推移軒」と称する彫り師が、儒医山崎普山の「農家訓」という教訓本を寛政十二（一八〇〇）年に刊行した例が、目下偶目する物としては最も早い。内容は藩内各所を巡回して農家の心得を講演して廻った中身を書きとめたもの。著者普山は藩医山崎杏雨の二男として享保十四（一七二九）年に生まれ、俳諧に遊ぶ傍ら庶民教育に尽力し、恐らく本書もその刊行費用なども自から出資し、彫り師の推移軒にゆだねて

刊行配布したものであろう。

天保三（一八三二）年、同じく博多の麹屋番と称する町の万玉堂次助という板元が、藩儒月形質の漢詩集「山園雑興」一冊を江戸の大板元山城屋佐兵ヱと合板で刊行している。この場合主板元は山城屋だったようで、本文及び菅茶山・頼杏平・頼山陽・菊池五山といった当代名家の序文を山城屋が江戸で製作したものに、更に藩儒竹田定夫、佐賀藩儒古賀紫溟、著者の長男月形弘、伊勢の韓聯玉といった主に地元名士の序跋を補刻して一冊としており、補刻部分は明らかに田舎版独特の版面を示していて、万玉堂による博多での補刻である事は明白。すなわち万玉堂という板元は、この時点で板元として自立してはいたもののなお力不足で、江戸の大板元山城屋をたのみ、補刻及び地元での売り捌きを受け持ったのであろう。本書には前述の補刻部分を持たぬ別本の存在も確認出来ており、それが山城屋単独板として江戸で売られたものかと思う。ともあれ万玉堂は博多における最初の板元として記憶されるべき本屋であることは疑いないが、残念ながらその実体は今の所ほとんどわからない。ただ、当時和学に名のしられた豊前小倉藩士西田直養（なおかい）の随筆中に「万玉堂額」と題して「ふみのはやしわけつくせども文字しらぬはかた最初の変屈のやつ」という狂詠を見る。これは博多の有名な禅寺「聖福寺」が、元久六年後鳥羽上皇より賜った宸翰「扶桑最初禅窟」の勅額を山門に掲げていた有名な事例を「博多最初変屈」ともじったもので、直養の眼からは本屋とはいえ文字知らぬ変屈者と映ったであろう万玉堂の片鱗をうかがわせるに足る好資料ではある。筑前ではその後、福間町に泰成堂、川端町に万屋、越後屋、東町に百花堂、また太宰府天満宮に笹屋などという板元が見出せるようになり、何れもまったくの田舎版ながら、順調な発展ぶりを示すものと言える。

同じ頃、筑後久留米に中沢嘉右衛門という彫り師兼業の板元が見逃せない存在である。筑前夜須の大庄屋佐藤藤右衛門の出資で、大儒貝原益軒の未刊の教訓本「君子訓」三冊を天保十三年（一八四二）年に刊行するが、その出来栄えは三都板と比べても全く遜色ない精巧な仕上りであり、更に嘉永二（一八四九）年、久留米の俳人保久志編の俳書「無尽集」一冊は、全丁に渉って彩色刷りが施されており、ここに田舎版の蔑称は払拭されたものとみてよい。彩色刷りの技術は墨や朱の一色刷りとは違って、色数の分だけ色板を作り、それを重ね刷りして色のズレがないように心がけねばならず、三都でもようやく宝暦前後（一七五〇）に興った技法であった。この中沢氏は九州地方における出版文化の達成度を云々する時、是非とも究明されねばならぬ存在であることは間違いないが、今の所残念ながら、前記の立身屋や万玉堂同様、ほとんどその手がかりさえ見出せずにいる。

韓国の大学出版部は今どこに立っているか

朱　弘均（韓国・建国大学校出版部長）

朱弘均（チュ・ホンギュン）氏は一九四四年生まれ、韓国ソウルの建国大学校出版部の統括者である出版部長をつとめる傍ら、論文「韓国大学出版の構造的特性に関する研究」で修士号を取得、また大学で出版論を講義する研究者でもある。二〇〇二年夏の日韓中三カ国セミナーでは、韓国の大学出版の現状を冷静に見つめ、新しい大学出版モデルを提示した発表で、三カ国の聴衆の注目をあつめた。朱氏は、以下の文章でも触れられるように、大学教員が兼職することが多い韓国の各大学出版部部長のなかにあって、出版実務者から部長に就任した貴重な存在である。ここに紹介する文章は、韓国大学出版部協会の機関紙『大学出版』に、企画連載「大学出版を診断する」の第一回として掲載されたものの抄訳である。日本の大学出版がかかえる問題との驚くほどの近さと、同時に韓国に固有の状況を読み取ることのできる興味深い論文である。

（翻訳文責・編集部）

韓国の大学出版を取り巻く状況

韓国で大学出版とは、出版一般はおろか社会とも切れた、大学の保護膜のなかに隔離された出版機構として一般的には認識されてきた。韓国の出版産業が論議されるときも、大学出版の役割は歪曲されていたり、はなから出版の範疇から度外視されていたりする。

これは、今日の韓国の大学出版部が、韓国の学術出版を代表する機能と役割をもとうとしながら、出版界全体における位置づけを確立してこられなかったところに、根本的な理由がある。いままで大学出版は、アカデミズムの単なる補助機関としてだけ機能してきた。ただ学術書だという理由で、体系的な原則もなくあれこれと本を出版してみたり、教員の原稿を出版代行する役割にだけ重点を置いてきた結果である。

もちろん、このようなパラダイムが大学出版部全体を覆っているわけではない。韓国の大学出版の歴史をみたとき、五〇年の長きにわたる歴史をもつ出版部もあれば、五年の歴史の出版部もあるが、ほとんどの主要な総合大学が、一九六〇年代から七〇年代に出版部を創設している。その設立より、今まで大学出版が築いてきた業績は、また非常に大きい。特に、伝統ある大学出版部は、学術書、専門科目

の教材、一般教養書の高水準な刊行を進めることで、大学出版の本質を形成してきた。それが、一般の商業出版とも区別された特性をもつものとして、大学出版の地位を築いてきたことは、誰しもが認めるところであろう。

しかし、いま韓国社会とその出版環境は変化している。変化の速度はあまりに速く、情報化だとかグローバル化の意味すら認識できぬまま状況に弄ばれている。たえず進歩するテクノロジーが出版に導入され、生産と流通、消費など出版様式全般に途方もない変化をもたらし、出版関係者は危機感をもち新たな成長方策を探っている。またこのような変化は大学本体にも同様に訪れている。各大学では教育改革、構造改革、大学運営の合理化をとの声がかまびすしい。特に韓国では二〇〇三年から大学入学定員に対して志願者数が割り込むようになり、韓国教育市場の開放により予想される外国大学の上陸、将来の国家補助金の削減など、大学の財政難は深まり、大学も生存のための構造改革が急務となっている。

このような状況は、大学出版にとっても例外ではない。むしろ、一般の出版社よりも、厳しい状況に晒されているといえる。これは、大学出版が公共の組織である大学組織のなかにありながら、実際、機能面では一般出版市場の論理のなかにいるためだ。大学が経営合理化を押し進めるなかで、大学出版部は、大学の支援なく自分の努力による生き残り策をとらざるをえなくなり、さらには出版部の縮小または廃止の問題まで云々される事態が現実味をもって予測されているのである。

いま、各大学は、大学院を中心とした教育への転換、複数専攻制の拡大、学科の統廃合、学部の拡大改編、教養課程の全面改編など、「先進大学へ」との旗印を掲げて学校改革をしている。教員も講義の人気度によって、ポストも左右される状況にまで進んでいる。なかでも、今まで大学出版部経営の基幹となってきた、教科書を多く使用する教養必修科目ですら、選択科目になったり、なくなったりする傾向にあるため、今後その教科書による出版部の収入は著しく減り、独立採算制をとっている出版部の経営に重大な影響を及ぼすと判断される。

いま韓国の大学出版部はどこに立っているのか、そしてこうした変化に対してどのように対応すべきなのか、この課題を考えてゆくことが、大学内では大学出版部の役割と重要性に対する関心と認識の形成をもたらし、大学の外に対しては出版産業において大学出版がもつ意義を追究することにつながってゆくだろう。

大学出版の「本質」とジレンマ

高麗大学校出版部の基礎を確立したチョ・ヨンマン教授が一九五九年に書かれた文章から、当時の大学出版の役割観を読むことができる。「大学出版部の使命は四つ考えられる。それは、①学術書、特に商業出版社で手をつけられ

ない専門学術書の刊行、②教材の出版、③大学公開の趣旨に沿った、啓蒙的学術書の刊行、④学生を主な対象とする一般的な教養書の刊行。」大学出版とは営利を追究するのではなく、最も重要な役割は、やはり大学出版でなければ出版できない本、すなわち、経済性を考慮することができない学術図書の出版にあるとされたのである。

しかし大学出版部は、大学・その他高等教育機関と、図書出版とのあいだに存立している。出版は出版として少なからぬ自律性を備えなければならない。大学母体の一部としての事業であっても、それでもひとつの事業として経営されなくてはならない。大学出版部が大学に帰属しているために、利潤よりも知識の発展のほうに目的の比重があるのは事実である。しかし、大学出版部だからといって、全く損害を甘受する出版だけに固執しなければならないわけはない。大学出版部は事業的な面でも、策定された予算の範囲に赤字をとどめ、最低限の利益を求めるという、事業としての機能をこそもたねばならない。大学出版は、大学のなかでは採算性のある組織であることを求められ、大学の外では（非営利的な）文化機関であることを要求されている。私たちはこうした相反した期待のなかにあるのであり、この点で、一般の商業出版社よりさらに厳しい位相に置かれている。

韓国大学出版部の構造的性格

韓国の大学出版部は、その運営や組織面で、次のような構造的性格をもって発展してきた。

①韓国のほとんどの大学出版部は、大学本体の予算の外で運営されるように認められた体制をとることが多い。大学の「恣意機構」として設立された附属機関であり、自主運営の工夫を生かすことが認められている。

しかし、大部分の出版部の運営体制は、出版部の責任者である出版部長を、大学教授が兼職することとしている。出版事業体としての大学出版部の独自性を大学がどの程度認識しているのかという点でも、大学の一般部署と同じように運営している大学出版部があるかと思えば、独立法人の形態や独立採算制で運営するようにさせ、出版活動と経営をほぼ自助努力に任せるような二重構造的な経営形態とに分かれている。

②この間、大学出版部が力を注いできた主要業務は、学生への教育支援としての教養科目教材の大量普及・教科書販売であったが、これは、運営資金を確保するためには不可避の手段でもあった。

③ほとんどの大学出版部は、規模と組織の零細性により、大学内の出版機構として、教員の著作を出版代行する役割に重点を置くような編集・製作業務が中心になった。その結果、〝書籍を企画する〟ことに対する認識が育ってこなかった。

④出版部に対する大学運営者の認識によって、大学出版の発展のありようが変化してきた。総長、副総長などをはじめとした学務行政のトップを占める教員に、出版部の役割に対する認識が不足すると、大学が出版部の仕事を滞らせる原因の一部になることもある。大学経営陣の出版部に対する重要性の認識と関心の高低が、財政支援、人員増強、そして出版の奨励などで、大学出版の活性化にとてつもなく大きな影響を及ぼしてきた。

現実的議論を発信する

いままでも、韓国の大学出版の停滞性を克服するため大学出版人たちは議論をしつづけてきた。議論の強調点は大きく二つに要約される。

①大学出版がその基本的機能と役割を遂行しながら飛躍し変化をとげるためには、まず大学出版人自身のあくなき努力が必要である。不断の自己開発と専門性の獲得はもちろん、斬新な企画で水準の高い学術図書と教養図書などを開発・出版し、大学出版が名実共に学術出版の主たる担い手であることを国家と社会にしらしめなければならない。

②大学は大学出版の重要性を確実に認識して、出版部が活性化しようという上述の努力の足がかりを用意しなければならない。そのためには出版に必要な財政支援はもちろん、優秀図書を開発できるような人的構成とそれにふさわしい出版環境をつくり、たえず督励しなければならない。

この議論は、いいかえれば、大学出版が発展途上の状態で足踏みしていることの一次的原因は大学出版人自らの進取性・専門性の不足としながらも、母体大学の認識不足と関心不足による環境の未整備に大きな問題を看取るものである。大学出版部が独創性を発揮し学術出版に最適な体制をとろうとするならば、大学の保護と支援により人事面と運営面において独自性と専門性が維持されなければならないのだ。

しかし、大学出版人たちのこの理想は、現実的な構造の矛盾のなかで悪循環［大学の無理解→出版の停滞→大学のますますの無理解］に陥っている。大学当局と出版部がひとつの枠組みで合致して事にあたることができず、各々の立場から相手に期待だけをする状態なのである。

この変化する時代のなかで、大学出版だけが従来のような発展のパターンを繰り返すことはできない。われわれ大学出版部はこの世界的変化のなかでいまどこに立っており、また大学出版発展のためにどのような努力を傾けているかを私たち自身で冷徹に批判しなければならない。そのうえで大学出版が大学の学問発展にどれだけ寄与しているかを実証的に検証し、それを大学に、ひいては社会全体に、私たち大学出版人自身が発信することが求められているのである。

明日の日本大学出版部協会

渡辺　勲（日本大学出版部協会幹事長・東京大学出版会）

未完にしてしまった本誌前号の拙文「大学出版部協会の歴史的展開」を受けて書き始めましたが、文脈的整合性には意を払いませんでした。ここでは、「大学出版部とは？」に類することは書きません。日本の、二七大学出版部の加盟によって社会的存在として現にある「日本大学出版部協会」という組織体について、思うところを書いてみます。

バーチャルな、しかしあり得る近未来

次の引用は、A新聞に掲載された日本大学出版部協会（AJUP）年次大会に関する紹介記事です。

「二〇〇X年八月二十五日、五〇大学出版部を組織するAJUP年次大会が軽井沢Yホテルを会場に四日間の日程で開催された。大会事務局によれば、営業部会・編集部会・電子部会・国際部会への参加人数は会員外参加者も含めると三〇〇名を超え、大会は事業的にも成功した、という。AJUP内には電子部会が構築の中心を担ったITネットが効果的に張り巡らされており、会員相互間の日常的な意思疎通は十分に行われていると聞いていたので、集会型の大会はもはや無用ではないか、と問うてみた。

事務局長のN氏は『だからこそ益々必要なのです。全国に散らばっている個々の出版部にとっては、年に一度のこの大会だけが、多くの仲間たちと共に、大学出版部の原点を意識しながらフェイス・トゥ・フェイスで議論の出来る場であり、共同事業遂行上の要点を、目を見ながら確認出来る場でもありますから。』と答えてくれた。大会統一テーマはここ数年間『深化する学術研究の危機―大学出版部の役割を再確認する』で、変り映えしないのだが、四部会において各五本の報告をもとに二日間にわたって繰り広げられた議論には活気が漲っていた。それには、事務局が中心となり報告予定者と共に編集した予行集（有料）の質の高さが貢献している。大会三日目は全体会議で、中心議題は事務局が四部会の有力メンバーと共に立ち上げ準備を急

いでいる、学生・教師・書店・ＡＪＵＰを結ぶ『専門書ＥＯＳ－ＥＤＩシステムの現状と展望』であった。最大の問題は資金であることが確認され、その打開策について検討されたが、事務局からはそれなりの目算が立っているとの報告だった。大会最終日は、五〇大学出版部代表者会議で、事務局より事業計画の遂行状況と決算見通しの報告が行われた。この会議に出席しない参加者は事務局が用意した半日ツアーに出かけ、懇親の実をあげたようだ。大会報告はネット公開されるが、一ヵ月後に有料頒布される報告集への需要が最近増える傾向にある。ＡＪＵＰは、加盟出版部の独自活動を慎重に踏まえながら、事務局を軸に採算の合う共同事業を推進し、その一方では出版界と教育界とを結ぶ理念集団としての社会的役割をも意識している。また、来年の世界大学出版部協会東京大会のホスト団体としての準備活動が国際部会と事務局との連携で進行している。事務局長の言では、『こんな大きな集会は願ってもない事業機会』とのこと、事務局員の士気は高い。」

「協会」を支えているエネルギー

日本大学出版部協会は、加盟二七大学出版部が相互に、懸命になって支え合っている組織です。個別出版部の、組織の在り様だけでなく問題意識も出版機能の質も量も、そしてもしかすると設立目的さえもが多様であるかもしれないのに、何故にこの組織は成り立ち存続しているのだろうか。このような問いを、私のような立場のものが発することと自体、問題であるかもしれません。が、私は協会四十年の軌跡を追う中で、実はずっとこのことを考えていました。この組織は、「協会」となるに当って掲げた目的、すなわち「協会は、大学出版部の健全な発達と、その使命の達成をはかり、もって学術文化の向上と、社会の進展に寄与する」（会則第三条）ことに撃って一丸となってきたから、四十年もの歴史を刻むことが出来たのでしょうか。公式的にはそうかもしれません。しかし、私もよく承知している、少なくとも過去十年ほどの協会活動の実際は、そんな奇麗事では済まされない、重い中身と目に見える成果（出来事）で満たされてきましたが、それらは、思い切って言ってしまえば、協会組織全体からみれば限られた担い手たちの献身的な、労働と時間の無償の供出によって支えられてきた、と言えるのではないでしょうか。組織が拡大し多様性が増し活動の仕組みが複雑化しその領域が拡がって行くにしたがって益々この組織は、担い手たちによりいっそうの献身を要求するようになってきた、とも言えるのではないでしょうか。私のこの発言に最も大きな違和感をもつ方々が、実は、言うところの担い手の皆さんであることを私は知っています。私自身が担い手の端くれであると自認しているから、分かるのです。協会活動には、素晴らしく楽しく遣り甲斐を感じさせてくれる吸引力が確かにあります。しかし、と私はあえて言いたいのですが、この組織は、活動の

質と量の現在水準の維持のためだけであっても、このような担い手たちの献身的無償労働のみに依拠していては、早晩、もたなくなるのではないか、この「不安」を正面に据え「ではどうするか」を考えることなく未来を語ることは、私にはできません。

未来から現在を照射する

協会は法人格を取得していないとはいえ、社団的組織です。社団の成員である社員（加盟出版部）が社団の一員であり続けようとするのは、そのことが社員の「利益」にかなっているからであり、それ故に社員としての義務（活動への参加、会費の納入、など）も果たすことができるのです。このことは、どのような性格の社団にも通ずる原理的なことですが、問題は協会の場合の「利益」とは何であるか、ということでしょう。

実はこの「利益」について考えてみようとしたのが、先に紹介したA新聞の仮想記事なのです。協会の現実から出発するとどうしても、現実がもつ制約的側面を意識し過ぎてしまい、「可能性」を抱え込んだふくらみのある思考ができなくなります。現実をまったく無視しては話になりませんが、可能性のある未来を想定して、そこで考えてみるというのは、現実を前向きに変えていこうとするときの思考法として意味があると、私は思っています。

さてでは、未来の「日本大学出版部協会」は加盟五〇大学出版部のためにどのような「利益」を実現しているでしょうか。基本的には以下の四点に集約されると思います。

① 主として四部会活動による大学出版人らしい研修・情報交換・懇親（仲間意識の醸成）が産み出す、協会組織維持にとっての基盤的「利益」。

② 事務局主体の事業に加盟出版部が参加することによって産み出され、事務局を経済的に支えるだけでなく、事業参加者にも還元される「利益」。

③ 事務局機能と各部会活動とが連携し新規事業を開発して産み出し、加盟出版部が必要に応じて対価をもって利用できる「利益」。

④ 加盟出版部、四部会、事務局が一体となって協会の社会的地位を向上させる活動によって産み出される「利益」。協会に加盟していること自体が個別出版部の評価を高め、利益として認識される。

このように整理してみると、実は諸「利益」はバラバラに存在しているのではないこと、利益産出「機能」も個別に発揮されるのではなく相乗的であることに気がつきます。このことを押さえておいて、つぎに、では「利益」と「機能」の実現を可能にする条件とは何か、について考えてみました。それが、以下の五条件です。

① 「規模の論理」が働く程度の加盟出版部を獲得する。

② 事業主体としての社会化を促進し（法人格取得）、事業に対する寄付金・助成金等の受理主体となる。

③　収益的事業を担えるような事務局を確立する。
④　四部会の自立的・自律的活動と事務局機能とが相乗効果を産み出すような協会組織（仕組み）を作る。
⑤　右四条件を結合できる執行主体を確立し、活動の裏づけとなる財務活動を成立させる。

これまで私は、協会のありうる未来と、現実とを、架橋する作業をしてきたつもりですが、ここからは一転して、現実の協会と向き合い、私の思うところを書いてみます。

当面の課題と、大学出版部協会の可能性

さて協会が当面している課題は、協会の歴史的到達点と協会を取り巻いている今日的環境とに規定されています。ということは、現在の協会の活動内容・活動水準、社会的認知度・社会的機能をしっかりと維持することが、当面の課題の筆頭に挙げられねばならない、ということです。しかし、現状維持の課題は、方向性をもった「創造的活動」と結合しなければ衰退の道を辿るだけです。そこで私は、当面する課題を、協会の可能性と結びつけ、「維持的活動」と「創造的活動」という枠組みで考えてみました。ここで言う「維持的活動」とはもっぱら協会の組織問題に属することであり、「創造的活動」とは協会組織が産み出す活動内容の革新と得られる「利益」の拡大を意味する、とします。両者を結合する鍵概念が「担い手」です。誤解を恐れずに単純化すると、「どんな組織を作ってどんな活動をするか、その中核的担い手は誰か、活動の成果が皆のものになる仕組みが機能しているか」が当面の課題である、と思います。平凡な結論のようですが、どんな組織とは何か、どんな活動とは何か、中核的担い手とは、……と問いつめていくと、ことは単純・平凡ではなくなってきます。それぞれについての私の意見は、これまで記してきたことに多少は反映していますが、これ以上の具体性を伴った見解は、協会の機関（総会・幹事会）に持ち出して議論していただかねばならないことだろうと、心得ています。

おわりに

国公私立を問わず全国の大学ではいま、何故か、急速に「大学出版部」作りが進んでいるようです。協会の当面する課題とこの現象は、当然、リンクしてきます。しかし決定的に重要なことは、協会はこの現象を能動的に受け止め、主体的に対応しなければならない、ということです。

最後に一つだけ、いま現在、協会加盟出版部であるか否かを問わず、大学出版部をもっているすべての大学の理事長・学長にお願いしたいことがあります。大学出版部の現状は実に厳しいのです、もう一度しっかりと、大学の中に出版部を位置づけてください。そして現場の責任者はもう一度しっかりと、出版の世界に出版部を位置づけましょう。両者の結合が、大学出版部と、そして日本大学出版部協会の、未来に向かっての確固たる位置を保証するのです。

■ 科学する目 10

都市の生き物たち

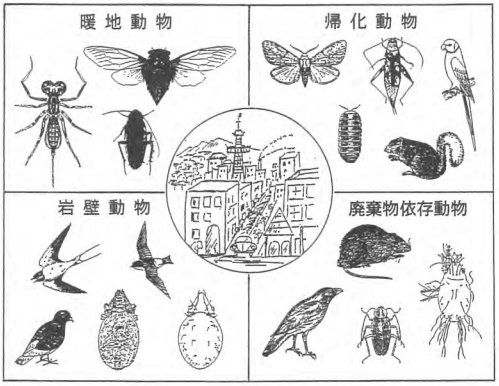
青木 淳一

都市は人間が住みやすいように、人間のためだけを考えて出来上がったものである。したがって、人間以外の他の生物たちにとっては、多分非常に住みにくい場所であるに違いない。事実、キツネ、イタチ、ノウサギなどかつて東京の中心部分にも暮らしていた動物が都市化の進行にともなって消え去り、西部の奥多摩地域の山林に残存するだけとなった。しかし、都心からすべての動物がいなくなってしまったわけではなく、結構色々な種類が住みついている。

その代表はハシブトガラスである。私は、都市の土を調べる必要があって、まだ人が現れない早朝に銀座四丁目の裏通りを歩いたことがあった。午前五時の銀座は夜の賑わいが嘘のように静かで、私のほかにはホームレスの男が一人歩いてくるだけであった。その時、にわかに空が暗くなったと思うと、おびただしい数のカラスが舞い降りてきた。おそらく、ねぐらとしている明治神宮か皇居の森あたりから飛んできたのであろう。頭が良くて早起きのこの鳥は、ゴミ回収車がやって来る直前に道路へ降り、ゴミ袋を突ついて食べる物を漁る。そこには、ノラネコ、ドブネズミ、ゴキブリなども現れる。彼らは都市に多い生ゴミなど、人間の出す廃棄物に依存している動物であり、よほど人間がよい工夫を思いつかない限り、都市にははびこり続けるであろう。

以前は聞いたことがない「ワシワシワシ……」という大きな声で鳴くクマゼミが東京で見つかるようになった。従来、北海道には生息していなかったゴキブリが札幌市内に住みついた。恐ろしい姿をしていてサソリに似てはいるが毒は持たないサソリモドキは沖縄や奄美大島では普通に見られる虫であり、九州の天草島が分布の北限とされていたが、これが四国や本州の街中でも見かけたという報告がポツポツ出てきた。これらの南方系の虫たちは冬も暖かい都市を目指して分布を北へ北へと広げている。

晩秋になると日本各地の都市の夜の街路樹で「シリーシリー」と喧しく鳴くア



オマツムシ、鎌倉などの街中に現れて電話線をかじって悪さをするのに、その姿から人々に可愛がられているタイワンリス、都市の公園などで見かけるようになったピンクと黄緑色の派手な色彩をした大型のワカケホンセイインコ、一時は日本の都市の街路樹を丸坊主にしてしまった大害虫アメリカシロヒトリ、都市の石ころや植木鉢を引っ繰り返すと、いくらでも見つかるダンゴムシ。これらはみんな外国からやって来て日本の都市に定着した帰化生物なのである。

どこの都市でもたくさん見かけるドバトは都市鳥の代表である。ビル、橋、駅舎などで生活しているが、公園の森や雑木林の中には入っていかない。近年、長野、八王子、静岡などの市内ではイワツバメが巣をつくっている。これらの鳥は本来植物の生えていない断崖絶壁や岩場に生息していたものである。それが都市の人工的な建造物を岩場と勘違いして(?)住みついているのであろう。

以上に述べたように、都市動物を注意深く見てみると、都市生活をするようになったわけには様々な理由があって、廃棄物依存動物、南方系動物、帰化動物、岩壁性動物の四つのカテゴリーがあるように見える。人間は都市にたくさんの植物は植えるが、動物を「植える」ことはしない。それでも、色々な動物たちが勝手に都市に住みつき、したたかに生きている。

この地球上、たった一種類の生物だけが住んでいる場所というものはない。したがってヒトだけが住める場所をつくろうとしても、それは無理なのだということが、よくわかるのである。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

国際子ども図書館

◀外観

平成十四年五月、国立国会図書館の支部として「国際子ども図書館」が開館した。わが国初の国立の児童書専門図書館の誕生である。上野の森の奥、公園の喧噪も届かなくなるあたりにたたずむその建物は、明治三十九年に日本初の国立図書館として創建されたもの。ルネサンス様式の代表的な明治期洋風建築として、東京都選定歴史的建造物に指定されている。

煉瓦造りの重厚な洋館の、左方に突き出たガラスボックスがエントランスである。このガラスボックスは、建物の裏手中庭側にも壁面をすっぽり覆うように設置されていて、光がたっぷりと差し込むラウンジとなっている。元は外壁だった部分を今は内壁として身近に見ることができ、なかなか興味深い。この図書館の魅力の一つは、当時の建物を最大限に保存して利用しているところだろう。漆喰の内壁、柱や天井の装飾、そしてシャンデリア。雰囲気がありとても美しい。

ひとしきり建物を堪能したところで、いざ閲覧室へ。まずは一階の「子どものへや」へ向かう。入り口から部屋をのぞくと、ゆるやかにカーブした書架が目に入る。部屋の中央に丸いベンチがあって、それを囲むように円形に書架が配置されているのだ。その書架の外側には、歴史・くらし・宇宙・生き物・環境・スポーツなどの図鑑や読み物が並び、内側には絵本や物語が並んでいる。円形のためぐるりと見渡せるし、とぎれることなく次々と本をたどっていける。そして何より堅苦しさを感じないのがいい。カウンターで尋ねてみると、この部屋の本は、子どもたちに自由に手にとってもらうために、納本制度で収集した本とは別に新たに購入したそうだ。長く読み継がれてきたスタンダードなものや情報の新しいものを中心に集められ、その数は約八千冊という。久しぶりに子どもの本に囲まれてみると、なつかしく楽しい気分になる。それはおそらく私がファミコン世代とはいえ、ゲームの前にまず本に親しんできた経験があるからだろう。子どもの読書離れが言われて久しいが、テレビもゲームも携帯電話も当たり前になった今

所在地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
開館時間　9:30～17:00
休館日　月曜日、5月5日を除く国民の休日・祝日、年末年始、資料整理休館日
休室日　2F「第一・第二資料室」：日曜日
　　3F「本のミュージアム」：展示会準備期間
電話　03-3827-2053（代表）
　　03-3827-2069（録音テープによる案内）
FAX　03-3827-2043
URL　http://www.kodomo.go.jp/

▶子どものへや

では、本は数ある選択肢の一つでしかないのかもしれない。しかし、ベンチに座り思い思いの姿勢で本の世界に没頭している子どもたちの姿を見ると、きっかけさえあれば本の魅力自体は変わることなく受け継がれていくと感じる。この部屋の隣の「おはなしのへや」では、子どものための絵本の読み聞かせやおはなし会が毎週土曜日曜に開催されているという。たくさんの本に触れたりおはなしを聞くことで、子どもたちにその楽しみが伝わるといい。

エントランス横の吹き抜けを、大階段でぐるりと上ると、二階は調査研究のための資料室。国立国会図書館と同様、十八歳以上が利用対象となっている。所蔵する国内外の児童書や関連資料、図書約二十万冊、逐次刊行物約千六百誌などのうち、過去二年分が開架されていて、それ以前の資料は書庫に保管されている。これらの資料に加え、児童書を扱う他の国内主要機関の蔵書があわせてデータベース化されていて、その三十万冊を超える資料を「児童書総合目録」によって検索し、閲覧・複写のサービスを受けることができる。この児童書総合目録は、電子図書館サービスとして上記URLからもアクセス可能だ。

三階には、子どもの本や文化に関する展示が行われる「本のミュージアム」と、パソコンで世界の絵本などを閲覧できる「メディアふれあいコーナー」。ヘッドフォンをつけパソコンをいじる子どもたちは、なにやら楽しげでほほえましい。

技術の進歩とともに、「本」は紙だけでなくデジタルデータという形もとるようになったが、私たちの知的欲求を満たし、楽しみを与えるその魅力は変わらない。図書館とは、あらゆる媒体による資料を収集・保存することによって、後世へ知を継承していくためにある。新旧の建築意匠を備えたこの図書館で、かつて自分が手にしてきた本を同じように夢中で読み、新たなメディアを楽しんでいる子どもたちの姿に、確かに続く未来が見えたような気がした。

（東京電機大学出版局　松﨑真理）

大学出版部ニュース

▼二〇〇三年度通常総会開催

四月三〇日、日本出版クラブにて「日本大学出版部協会二〇〇三年度通常総会」および各部会・懇親会が開催された。

総会は二四校二七名が出席（他に委任状提出は二校）。渡辺幹事長（東京大学出版会）の開会挨拶に続き、三浦幹事（明星大学出版部）を議長に選出し、以下の総会議案が提出され、承認された。

① 二〇〇二年度事業報告
② 二〇〇二年度決算及び監査報告
③ 二〇〇三年度事業計画（案）
④ 二〇〇三年度予算（案）
⑤ 二〇〇三年度役員改選
⑥ 新規会員入会

総会終了後、編集・営業・国際・電子の各部会が開催された。今年度から、国際・電子の両部会の発足、旧刊行助成部会の機能を編集部会に統合するなど、部会の機能再編・強化が図られた。

夜の懇親会には二三校九一名（顧問他四名、オブザーバー参加三校五名を含む）が出席。当番校の山本副幹事長（聖学院大学出版会）の開会の辞、渡辺幹事長の挨拶に続き、協会顧問・前幹事長の山下正氏の乾杯の発声で開宴した。途中、新会員の入会挨拶、地方会員校の近況報告、新人紹介、各部会長からの新年度計画の披露が行われ、協会顧問・元副幹事長の関野利之氏の中締めによって、約二時間の懇親会はお開きとなった。

▼東京国際ブックフェア二〇〇三開催

四月二四日から二七日まで、東京ビッグサイトにて「東京国際ブックフェア二〇〇三」が開催された。国内外から約五五〇社が出展し、書籍展示・販売、各種セミナーなどが行われ、活況を呈した。

日本大学出版部協会は、四〇周年記念行事の一環として、昨年の二倍の広さのブースに出展し、謝恩価格にて販売を行った。今回は、未加盟校の大正大学出版会（四月三〇日の総会において加盟）・東京学芸大学出版会・立教大学出版会・武蔵野美術大学出版局からの刊行物も展示し、協会活動の広がりを内外に示すと同時に、四日間で約六五〇〇名来場、売上げは九八五冊・約二五〇万円を記録し、過去最高の実績を残した。

▼第二四回日本生命財団出版助成図書

（刊行期間　平成一五年四月～平成一六年三月）

『〈都市的なるもの〉の現在――文化人類学的考察』

関根康正（日本女子大学人間社会学部教授）ほか著　東京大学出版会

『安藤昌益からみえる日本近世』

若尾政希（一橋大学大学院社会学研究科助教授）著　東京大学出版会

※日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に日本大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

▼大正大学出版会（新会員）紹介

四月三〇日の総会において、大正大学出版会の加盟申請が承認された。

代表者＝松濤誠達（大正大学学長）
設　立＝昭和二年に大正大学出版部として発足
既刊点数＝二一点

北海道大学図書刊行会

▼栃内香次・木村純編著『**21世紀の安全を考える**』（四六判・一八〇〇円）経済学・工学・理学・医学・法学・水産学・教育学の各分野から、暮らしと社会の安全について解説。▼篠塚信義・石坂昭雄・高橋秀行編著『**地域工業化の比較史的研究**』（A5判・七〇〇〇円）近年、社会経済史学では工業化過程での地域経済の重要性が再認識され、活発に研究が進められている。本書では地域工業化の展開と国民経済形成の間に内在する歴史的関連に新たな視点と解釈を提示。▼及川敬貴著『**アメリカ環境政策の形成過程**』（A5判・五六〇〇円）まだ知られていない中央環境行政機関＝環境諮問委員会CEQの、設立背景、機能実態、活動を歴史的に考察。連邦政府トップレベルの政策決定システムの基本構造を究明する。▼村上隆編著『**サハリン大陸棚石油・ガス開発と環境保全**』（B5判・一六〇〇円）石油・天然ガス開発とそれに伴う海洋汚染の蓋然性に関する問題を、自然科学、社会科学、人文科学による学際的立場から分析。オホーツク海圏の資源開発と環境保全に関する共同研究の成果。

東北大学出版会

▼水原克敏編『**自分―私を拓く―**』（A5判、三四一頁、一〇〇〇円）本書は、東北大学一年生を対象とした教養教育「自分ゼミ」の記録である。この本では、話題提供者の話やその後の討論を通じて、学生達が如何に自分を拓き、そして再構築していったのか、その迷いの様が見えるように編集されている。是非、多くの青年に読んでいただき、人生の糧にして欲しいと願っている。水原編『**自分―私がわたしを創る―**』の姉妹書。

▼中村維男編著『**情報技術と社会**』（A5判、一九二頁、一五〇〇円）情報技術に基づいた情報化社会は、インターネットを介して世界中に広がりを見せている。情報技術と人間社会との関わりは、電子商取引やネット金融等のビジネスだけでなく、医学の分野における電子カルテ等にも現れている。その中で、情報化社会におけるセキュリティー・ネットを使った犯罪、著作権の問題等、重要な問題が生じている。本書は、このような内容を、まず情報技術の基本を紹介し、詳細に分かり易く説明している。この分野での恰好の教科書。

流通経済大学出版会

▼角本良平著『**道路公団民営化 二〇〇六年実現のために**』（三〇〇〇円）

道路公団民営化は、実現一歩手前まできた。政府・与党は二〇〇六年三月までに実現させるという。国民として、成果を期待したい。しかし、この方針には二つの問題が存在する。その第一が、今後五十年の間に債務を完済するという「償還主義」の存続である。第二は、「プール制活用」による不採算路線建設の思想が根強く残っていることである。これらは、二〇〇六年に発足するであろう民営企業の経営にとって大きな障害になる。昨年の「民営化推進委員会」の「意見書」でもこれら二つの問題に対する対策は持ち越された。

本書は、僅か六カ月という短い期間であったが「民営化推進委員会」において、改革をめぐってなされた論争の攻防を詳らかにし、道路建設にからむ問題点を国民の前に明らかにする。そのうえでこの改革を着実に進めるための課題と対策を明示する。三年後に本当の民営化を実現させるために、納税者である国民全員に是非お読みいただきたい一書である。

聖学院大学出版会

▼ローラ・デラニー・ガルスト、小貫山信夫訳**『チャールズ・E・ガルスト――ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生』**（四六判・二八八頁、四〇〇〇円）。

チャールズ・E・ガルストは、自らを「単税太郎」と名のり、土地のみに課税すべきことを説き、「社会雑誌」「労働世界」などに寄稿し、また著書『単税論』を著し、明治期社会改革運動の論陣をはった。最晩年には「国会開設」を提言した。また片山潜、高野房太郎たちと交流した労働運動の先駆者であった。しかし、ガルストがキリスト教宣教師として、秋田でキリスト教宣教に取り組んだことは、あまり知られていない。本書は、ガルストの妻、ローラがまとめたガルストの伝記であり宣教師であるガルストが、アメリカの陸軍士官学校を卒業し、何を目指して日本で活動を展開したのか、その経緯を著す第一級の資料である。

関連書に工藤英一『単税太郎C・E・ガルスト――明治期社会運動の先駆者』（二四〇〇円）、保谷六郎『日本社会政策の源流――社会問題のパイオニアたち』（三六〇〇円）がある。

麗澤大学出版会

▼R・ピラード、R・リンダー著／堀内一史他訳**『アメリカの市民宗教と大統領』**（四六判上製・三六〇〇円）

建国二百年余で世界の覇権国たらんと団結するアメリカ。その力の背景に「市民宗教」という概念を置き、ワシントンからクリントンに至る歴代大統領列伝を物語りつつ、アメリカの宗教と政治の密接な関係を浮彫りにする。アメリカを深層から理解するために必読の書。

▼鈴木宣之著**『いちばん好きなこと一直線――子育ては、父親最大の仕事』**（四六判上製・一四〇〇円）

著者は、大リーガーとして三年目を迎え、いまや「アメリカン・ヒーロー」ともなったイチロー選手の父親である。息子・イチローの才能を見抜き、意思堅固なアスリートに育て上げた、知・徳・体のすべてを伸ばす独自の教育論を展開する。

『アメリカの市民宗教と大統領』本体3,600円（税別）

慶應義塾大学出版会

▼小熊英二・上野陽子著**『〈癒し〉のナショナリズム―草の根保守運動の実証研究』**（一八〇〇円）気鋭の歴史社会学者・小熊英二が、保守運動「新しい歴史教科書をつくる会」につどう自称「普通の市民」たちのメンタリティと心の闇を浮き彫りにし、「現代日本のナショナリズム論」を展開する注目の一冊。

▼国分良成編著**『中国文化大革命再論』**（慶應義塾大学地域研究センター叢書、三四〇〇円）新旧・内外の人材を結集した、画期的な「文革」研究論考集。

▼アントニア・フレイザー著・加藤弘和訳**『信仰とテロリズム―1605年火薬陰謀事件』**（四〇〇〇円）マイノリティとテロの問題を歴史的大事件の中に読む。

▼慶應義塾大学理工学部環境科学研究室編**『首都圏の酸性雨―ネットワーク観測による環境モニタリング』**（五四〇〇円）十二年に及ぶ測定による分析と、効率的な環境モニタリングの可能性を示す。

▼西澤直子編**『福澤諭吉著作集10 日本婦人論 日本男子論』**（二六〇〇円）敬と愛による独立した男女・家族関係を主張した、先進性あふれる福澤の女性論集。

産能大学出版部

▼山口宗秋著**『高年者を上手に活かす企業、活かせない企業』**（一八〇〇円）
高齢化が進んでいる。顧客も消費者も従業員も。リストラで高年者を外しても、残った若い従業員もやがて高齢化していく。企業が存続する限り、高年者雇用の問題は続いていく。したがって当面の不況対策と並行して、将来を見据えた高年者対策が必要である。単なる雇用の維持から活用に重点を置き換え積極的に高年者対策に取り組む企業のことは、若い従業員を含めた社内の全従業員に、働きがい、生きがい、希望を与えるであろう。本書は避けて通れない高年者の雇用・活用上のブレーキとなっている問題点を洗い出し、不況下だからこそ必要な、実務ですぐに役立つ対策として、詳しくまとめている。

▼飯田亨著**『地球のかくされた謎―二〇〇四年からすべてが変わる―』**（一〇〇〇円）
本書では過去の出来事から政治、経済、世界情勢、天変地異やさまざまな業種にいたるまで、陰陽背理（逆さまで一つ）の対称性で解き明かそうとしている。

専修大学出版局

▼藤本一美**『戦後政治の決算1971-1996』**（三三〇〇円）前作『戦後政治の争点1945-1970』より四年が経った。その後の一九九六年までの二六年間を一年毎に取り上げ、真に筆者自身が歩んできた戦後政治との関わりを踏まえて決算をした。もはや明確な「保守対革新」の対立軸は存在しない。本書は、戦後の政治ばかりでなく、近くて遠い現代史の再認識の基礎資料として役立つであろう。

▼矢澤昇治編**『環境法の諸相―有害産業廃棄物問題を手がかりに―』**（四四〇〇円）環境問題を解決するために環境法の体系化が、早急に求められている。本書は、これまでの個々の法領域ごとの断片的なアプローチを超えて、新しい法分野としての環境法の確立を目指す。

▼吉田雅明編**『複雑系社会理論の新地平』**（四四〇〇円）複雑系は人文・社会科学に一体何をもたらしたのか。各分野から複雑系的な問題領域を提示し、コンピュータ・シミュレーションを駆使し、市場における独占や、原始社会における商人と取引ルールの創発、企業間の価格競争のメカニズムなどを解明する。

大正大学出版会

▼小峰彌彦著**『般若心経に見る仏教の世界』**（二二〇〇円）これまでにない視点から『般若心経』の種々の疑問を解く、本格的な解説書。『般若心経』をその母体である般若経を通して、新たな問題提起を加えつつ、広い視野から仏教の世界の今日的理解を平易に提示している。

▼倉島節尚編**『宝菩提院本　類聚名義抄』**（六五〇〇円）京都東寺宝菩提院に伝わる『類聚名義抄』の写真複製と観智院本との関係についての論考を添えた。本写本は、高山寺本等の諸本には見られない部分が書写されており、辞書史・国語史研究の貴重な資料として必備の書。

▼清水宥聖・千葉眞郎編**『与謝野晶子書簡集―印影と翻刻―』**（二二〇〇円）与謝野晶子の処女歌集『みだれ髪』成立背景を解き明かす第一級の資料。本学所蔵の書簡四十三通の写真版・翻刻を掲載。

『般若心経に見る仏教の世界』
本体2,200円（税別）

玉川大学出版部

▼K・マックリーン著／井島真知・芦谷美奈子訳『**博物館をみせる**』（四〇〇〇円）。博物館の展示とその開発はどうあるべきか、利用者の立場を展示の作り手はどう考えればいいかを包括的に述べる。

▼M・ブラン＝モンマイユール他著／松本栄寿・小浜清子訳『**フランスの博物館と図書館**』（三二〇〇円）図書館・博物館に共通するもの異質なものを問い直し、一般への公開法と利用法、研究機関・生涯学習機関としての機能を論じる。

▼山本東次郎編著『**山本東次郎家　狂言の面**』（一五〇〇〇円）。山本東次郎家伝来の狂言面五六面を、原寸・原色で再現。一級の面打ち師たちが心の限りを込めて打ち、代々の狂言方によって受け継がれ、能舞台で生き続けて来た面の数々。

中央大学出版部

▼中央大学ロースクール進学対策特別委員会・現行司法試験対策特別委員会編『**法律家をめざす諸君へ―二〇〇三年度版**』（二〇〇〇円）法科大学院の設立と新司法試験について詳細に記述。現役の法律家が仕事の内容を紹介し、現行の司法試験合格者が試験突破のノウハウを熱く語る。

▼奥田泰弘編著『**市民・子ども・教師のための教育行政学**』（六〇〇〇円）教育改革を展望し、学校教育と社会教育を総合的に論じたわが国初の教育行政学書。教育行政に関心を持つすべての市民に示唆を与える。

▼上田髙昭著『**西田幾多郎の姿勢―戦争と知識人**』（二四〇〇円）戦時中、反帝国主義や学問の自由を主張した西田の姿勢を明確に捉え、戦後に悪質な捏造記事で西田排撃に走った人々の過誤を解明する。

▼森松健介著『**十九世紀英詩人とトマス・ハーディ**』（五〇〇〇円）日本翻訳文化賞を得た著者の詩人ハーディ論。万人の経験を歌う詩人像を描き出し、全詩の概要と滋味を抽出する。十九世紀詩人論満載。

東海大学出版会

E－BOOKの配信が始まります

▼宮田昇著『**学術論文のための著作権Q&A――著作権法に則った「論文作法」（電子版）**』（一〇〇〇円）

今年二月の発刊以来、教員、研究者、を中心に好評の本書を、当会ホームページ〈http://www.press.tokai.ac.jp/〉から電子配信することになりました。

書籍版と同等の字面、図表などが表現でき、デスクトップはもちろん、ノート型PCにデータを移せば、外出先でも気軽に読むことができます。特別な専用端末は必要ありません。データ配信形式は、世界標準のPDFを採用。実際に読むには、アドビ社が無償提供しているAdobe Acrobat eBook Readerが必要です。

本書はホームページの目玉コンテンツのオンライン知的コラム“WebTOKAI”に十数回連載したものを再編集し、紙媒体の書籍版と電子版で公刊する、ワンソース・マルチユースを体系化したものです。

今後も“WebTOKAI”のコラムを中心に電子書棚を充実して参りますが、一部から注文→印刷・製本→納品が可能な〝オンデマンド新刊〟の出版も計画中です。

東京大学出版会

蓮實重彦／アンドレアス・ヘルドリヒ／広渡清吾編**『大学の倫理』**（二六〇〇円）。二〇〇二年三月に「大学の倫理」をテーマに開催されたミュンヘン大学と東京大学の第二回シンポジウムをまとめる。「古典的大学」が市場化グローバル化の趨勢のなかで、いかに適合的な変容をとげうるか、大学を大学として成り立たしめる諸原則を維持しながら、新しい社会的要請にどのように応えていくか。「趨勢」に従属せず、批判的な分析を伴って、社会の真の要請を見極めようと問いかける。大学がいかにあるべきかを大学の立場で主体的に思索し、考察する仕事の全体を総称する含意で表題を「大学の倫理」とし、研究のあるべき姿と基準、教育のあり方、歴史と人類に責任をもちうる大学の位置づけなど、様々な課題とアプローチを包摂した。

東京電機大学出版局

インターネットの普及によるIT化の波は高等教育の世界にも押し寄せ、eラーニングに代表されるITを用いたオンライン教育が盛んになっている。高等教育を取り巻く環境はますます厳しくなるが、eラーニングは果たして本当に救世主になり得るのか。今必要なのは、事実の冷静な分析による現状把握と、効率的な運営手法の習得である。明確な答えを提示する二冊の新刊を紹介する。

▼吉田文著**『アメリカ高等教育におけるeラーニング―日本への教訓』**（三〇〇〇円）IT化が広範に進み、eラーニングがもっとも普及しているアメリカの事例を取り上げ、詳細に分析。教員の役割、学生生活、教育内容、学位の発行、コスト管理など、大学教育の変容するしくみを考察し、その功罪を明確にするとともに、今後の日本への教訓を得る。ITで日本の大学は生き残れるのか？

▼清水康敬監訳**『インストラクショナルデザイン入門』**（五四〇〇円）効率的・効果的なeラーニングコースを開発するための手法であるインストラクショナルデザインを詳述した実践ハンドブック。

東京農業大学出版会

〈カラー写真集100の素顔シリーズ〉

▼**『サハリン100の素顔　もうひとつのガイドブック』**サハリン100の素顔編集委員会編・伊藤雅夫責任編集

近くて遠いところというイメージの強いサハリン。東京農大樺太農場の跡に立つなど、日本の痕跡も興味深い。一月の平均気温が零下十三・八度という、激寒地域に生きる人々の生活が伝わってくる。

平成一五年三月／B六判

一二八頁／本体価格一六〇〇円

〈カラー写真集100の素顔シリーズ〉

▼**『東京農大お宝一〇〇選　もうひとつのガイドブック』**東京農大編・鈴木俊責任編集

知られざるお宝を公開。明治24年創設以来2003年で112年目を迎える東京農大の一品逸話集。創設者榎本武揚、初代学長横井時敬、鈴木梅太郎、棟方志功……、様々な人々の関りのなかから大切にしてきたものに触れることができる。

平成一五年三月刊／B六判

一四四頁／本体価格一六〇〇円

法政大学出版局

川島秀一著／四六判・上製・三二〇〇円

▼『漁撈伝承』（ぎょろうでんしょう）

・**朝日新聞／川村邦光氏評**（抄録）

漁師たちは漁の吉凶の兆しを敏感に感じ取って、災いを福へと転換させようとした。著者はそのような漁師たちの「神と共に生きている」姿を津々浦々を巡って見聞きし……「人知に尽くせぬ自然に対して、謙虚に向き合ってきた、漁師の胸騒ぎのようなもの」を描いてきたとまとめている。私には、漁師たちの黒潮の轟きのような胸の高鳴りの世界が浮き彫りにされていると思われた。

・**北海道新聞他／赤羽正春氏評**（抄録）

……著者の心根の温かさから来る見事な調査によって、海の民俗は漁業習俗だけでなく、それを支えた浜のオッカサンやカシキ、最も人に近い神々を扱う新しいジャンルの海洋民俗学に結実した。海に生きる人々が時にかいま見せる細やかな動作、その裏側に見えるトオチャンたちの気の小ささ、若いカシキの恐怖感、……これらをすくいあげて学問につなげていく手法の見事さ。観察眼は温かく、民俗は限りなく人の心に接近している。

放送大学教育振興会

平成十五年の新刊図書は学部九〇、大学院五の合計九五科目である。放送大学の十五年度開設科目三五八に含まれ、履修登録をした学生の手元に三月末日までに届けられた。

▼履修者数のトップテン（平成十五年度第一学期開設科目。カッコ内は受講者概数＝単位百名。外国語を除く）

学部科目＝①ユング心理学(49)②患者からみた医療(47)③心理臨床の世界(38)④心理学初歩(37)⑤心理学研究法(28)⑥人体の構造と機能(27)⑦自己を見つめる(26)⑧リハビリテーション(26)⑨社会福祉入門(25)⑩障害児教育指導法(25)

大学院科目＝①学校臨床心理学(20)②発達心理学(18)③学校システム論(17)④情報教育論(15)⑤学校臨床社会学(12)⑥家族心理学特論(12)⑦認知行動科学(12)⑧臨床心理面接特論(11)⑨精神医学(11)⑩才能教育論(11)

右のように心理学・医学・教育・福祉などの科目の人気が高いのがここ数年の傾向であり、学生・一般社会人など生涯学習を志す受講生のニーズがどの分野にあるかがうかがえて面白いデータである。

明星大学出版部

現在、学校教育において不登校や、いじめ、学級崩壊など多くの問題が指摘されている。不登校は児童に教育を受ける機会をなくすばかりでなく、他に必要な多くのことを学ぶ機会を逸しさせる。例えば、友人との付き合いや親からの自立。

オーストラリアの思春期を専門とする精神科医、クリス・ウェバー医師は不登校児のために絵本『THE SCHOOL WOBBLIES』を執筆、同じ精神科医のニール・フィリップスにイラストを依頼した。「スクール ウォブリーって知っている?」との問いかけから始まる本書に多くのオーストラリアの不登校児が救われた。

著者の友人であり、英文の本書を読んで感激し、日本の不登校児に是非読ませたいと翻訳、本出版部で刊行に向け尽力されていた田部田 功氏（本学人文学部心理・教育学科心理学専修専任講師）が急死するという予期せぬことが生じた。しかし、故人の遺志を知る友人らによって、日本語訳の絵本『**学校いやいやお化け ウォブリー**』（本体一、二〇〇円）として刊行、好評販売中である。

早稲田大学出版部

▼**『現代都市とエスニシティ―シカゴ社会学をめぐって』**（秋元律郎／四八〇〇円）現代都市における多様な人種と文化葛藤の諸相を、シカゴ社会学のエスニシティ研究に即して考察する。

▼**『完全リサイクル型住宅Ⅲ―生活体験と再築編』**（尾島俊雄監修／二〇〇〇円）リサイクル住居での生活を基に新しい建築様式を提案。早大理工総研シリーズ21

▼**『ドイツ表現主義と日本―大正期の動向を中心に』**（酒井府／六五〇〇円）日本はドイツ表現主義をどう受容したか。評論、翻訳を渉猟し知識人の反応を探る。

▼**『父―家族概念の再検討に向けて』**（孝本貢・丸山茂・山内健治編／三四〇〇円）家族の概念が揺らぐ今、父を通して家族とは何かを考える。シリーズ比較家族第Ⅲ期刊行開始／第1巻

名古屋大学出版会

▼秋田　茂著**『イギリス帝国とアジア国際秩序―ヘゲモニー国家から帝国的な構造的権力へ―』**（五五〇〇円）政治外交史と経済史を統合する新たな国際関係史の構築を試みた力作。

▼安藤隆穂編**『フランス革命と公共性』**（五〇〇〇円）革命を規定した公共性の転換の諸相を分析、自由をめぐる公共圏創出のダイナミズムを捉え、公共性論・フランス革命史に新たな次元を拓く。

▼望田幸男編**『近代ドイツ＝資格社会の展開』**（五八〇〇円）非エリート層に焦点を当て、職業資格に基づいた社会編成の展開と、人々の葛藤を照射する資格社会論の新たな成果。

▼田尾雅夫・西村周三・藤田綾子編**『超高齢社会と向き合う』**（二一八〇〇円）かつて誰も経験したことのない来るべき社会を概観し、そこで充実した生を送るための具体的指針を提供する。

▼堀田　饒監修**『糖尿病―予防と治療のストラテジー―』**（五〇〇〇円）最新の知見をふまえ、合併症に重点をおきつつ糖尿病の予防と治療の実際、医療経済と治療の最前線までを丁寧に解説。

三重大学出版会

▼石田正昭・波夛野豪編著**『循環型社会における「食」と「農」』**（B5判、一一八頁・一三〇〇円）

商品の生産・消費・再生産のプロセスを適切に制御する社会を循環型社会という。その循環型社会の中では、環境負荷の少ない「食」と「農」との連携の仕方が課題となる。食と農との距離を短縮すること、生産から消費にいたる動脈産業と廃棄から再生利用にいたる静脈産業とを効率的、効果的に結合する循環型ネットワークの重要さが説かれている。

三重県では「地産地消ネットワークみえ」その他の取り組みが活発に展開されている。それらの活動を「活動モデル」として紹介することも本書の目的の一つである。人文、社会、自然諸科学の専門家、「地産地消ネットワーク」の活動家からの総合的な知識、リアルな実践報告も含まれている。実践の指針を求める一般読者には必読の書である。教養課程の教科書としても役立つ。

▼**『三重大学遠隔事業室報告'02』**三重大学遠隔事業室編。三重大学と米国ノースカロライナ大学との遠隔授業の報告集。

京都大学学術出版会

▼A・A・ロング著／金山弥平訳『**ヘレニズム哲学―ストア派、エピクロス派、懐疑派―**』第二版（A5判・四四〇頁・五五〇〇円）ごく近年まで、ヘレニズム哲学は「プラトンやアリストテレスとは比較しようのない二流思想家が生んだ退屈な産物」とみなされていた。その誤解を払拭し、最近のヘレニズム哲学ルネサンスをもたらした世界的名著が、最適の訳者を得てようやく日本語になった。本書によって、エピクロスはたんなる実践的快楽主義者ではなく、総合的な思考を展開した当代きっての哲学者であったこと、懐疑主義は近世哲学における認識論の隆盛を触発することになった革新的な思想であったこと、またストア派の論理学、言語哲学、倫理学はその後の西洋哲学に巨大な影響を及ぼしたことが明かされる。同時に、中世、ルネサンス、宗教改革、啓蒙主義、近世哲学のそれぞれの段階でどのような影響を及ぼして今日に至ったかも展望されている。最良の入門書であるとともに、近現代の哲学研究者にとってもその背景を知る最適のテキストである。

大阪経済法科大学出版部

▼『**入門　経済政策―日本経済の再生を求めて―**』星川順一著／一八〇〇円／経済政策の究極の目的は人的資本の向上にある。特に資源のない日本経済にとっては、最上の課題である。経済政策を学ぶ上で、重要と思われる主要な観点を、ケインズ等の古典的な研究業績に留意しながら、現代日本の経済政策で直面する課題を例証しつつ、論点をまとめる。

▼『**図解　いま日本政治は！**』憲法研究所編／一五〇〇円／いま日本は政治制度を含め様々なシステムの急激なほころびが進んでいる。いま日本の政治はどうなっているのか、どこを変えるべきなのか。本書は図解を通じて出来るだけ簡明な形で浮き彫りにする。また憲法研究所は故田畑忍博士が創立され四〇余年、京都を中心に非戦、平和、護憲、中立を旗印として活動をする憲法研究者を中心とする団体。／序　民主主義断章／Ⅰ　いま公共政策の決定過程は！／Ⅱ　いま議院内閣制は！／Ⅲ　いま議会制民主主義は！／Ⅳ　いま安全保障は！

▼再版出来『**現代アジア最新事情**』二六〇〇円／『**現代社会と人権**』二五〇〇円

大阪大学出版会

〈大阪大学新世紀レクチャー〉創刊

講義で実際に使用されるテキストを一挙大公開！阪大の特徴を生かした内容満載の待望の入門・基礎シリーズ。身近な社会生活を充実させる珠玉の知識／松井茂記著『**日本国憲法を考える**』四六判・一八〇〇円　現代の社会現象から憲法基礎理論を説く／西原力編『**新ウェルネス栄養学**』B5判・二〇〇〇円　心と体の健康のための食べ物の話／大中逸雄・高城敏美他編著『**輸送現象論**』二〇〇〇円他

▼小泉潤二編『Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim』菊判・三〇〇頁・四〇〇〇円　環太平洋地域における政治・経済・国家・民族など多義的に捉えたシステムと文化の関わりを検証。インドネシアの織物からみたポスト植民地時代の伝統、国際資本時代に生きる小島国フィジー、豪州・NZ地域通貨がもたらす社会構造の変革他

▼K.Takada/W.R.Proffit編著『Orthodontics in the 21st Century』B5判・二一六頁・一〇〇〇〇円　世界的権威が語る歯列矯正の先端技術を豊富な写真・図版を通して紹介した保存版。

関西大学出版部

▼野村幸正編著『**行為の心理学**』（一五〇〇円）熟達者は、なぜ時と場所を得た即興的能力を技として発揮することができるのか？　人は場所に働きかけ、その行為を通して自己を形成する。身体、システム、関係性をキーに、熟達者の即興的行為を読み解いてゆく。

▼ロバート・オザーン著、伊藤健市訳『**アメリカ労使関係の一系譜**』（四七〇〇円）マコーミック収穫機会社とその後継インターナショナル・ハーヴェスター社における一世紀にわたる歴史を題材にニューディール型労使関係の成立過程やウェルフェア・キャピタリズムの起源を一次資料を駆使して克明に描く。

▼岩佐代市著『**金融システムの動態**』（七二〇〇円）過去三十年にわたるわが国金融システムの変容・変革過程を理論的・実証的に考察し、現下の金融システム不安定性の背後にある基本的要因を摘出し、銀行制度と金融規制に関する大胆な改革論を提示する。特に、預金保険制度の廃止、郵貯改革による公的ナローバンクの創設、柔軟なルール主義的金融行政の重視は興味深い。

関西学院大学出版会

新刊

▼アマルティア・セン著　細見和志訳『**アイデンティティに先行する理性**』（四六上製・一〇五頁・一八〇〇円）九八年にオックスフォード大学で行った講演録。訳者による解説付き

▼村田俊一著『Journey of a Development Woker』（英文）（A5変形・二〇〇頁・二一〇〇円）UNDPの活動による様々な経験を著した、国連職員を目指す学生必読の書。

▼岩本健一著『**児童自立支援施設の実践理論**』（A5上製・一四〇頁・二六〇〇円）問題行動を起こした子どもを対象とする児童自立支援施設で、長年取り組んできた著者による実践例を紹介。

既刊

▼天野明弘著『**環境問題の考え方**』（四六並製・二〇〇頁・二〇〇〇円）

▼田村和彦著『**魔法の山に登る―トーマス・マンと身体**』（四六上製・三〇〇頁・二九〇〇円）

▼大日向幻著『**イギリス諷刺詩**』（A5上製・二五三頁・三八〇〇円）

九州大学出版会

▼清水展著『**噴火のこだま―ピナトゥボ・アエタをめぐる被災と新生をめぐる文化・開発・NGO―**』（A5判・三八二頁・五二〇〇円）一九九一年のフィリピン・ピナトゥボ山の大噴火は二十世紀最大級の規模であった。本書は、被災した先住民アエタの民族としての十年にわたる生活再建の歩みと新生の記録である。

▼古谷嘉章著『**憑依と語り―アフロアマゾニアン宗教の憑依文化―**』（A5判・三八六頁・五八〇〇円）黒人奴隷制と天然ゴムブームがブラジル・アマゾンで生み出した、著しく混淆的なアフリカ系憑依文化のエスノグラフィー。

▼川田牧人著『**祈りと祀りの日常知―フィリピン・ビサヤ地方バンタヤン島民族誌―**』（B5判・三四四頁・七五〇〇円）フォーク・カトリシズムの枠組みで語られてきた様々な事象を、ビサヤ民俗社会における知識の運用と生活実践という観点から民族誌的に捉えなおす。

▼浅野ひとみ著『**スペイン・ロマネスク彫刻研究―サンティアゴ巡礼の時代と美術―**』〈長崎純心大学学術叢書5〉（A5判・四二四頁・一二〇〇円）。

〈書籍の表示価格は税別です〉

新生国際部会のテーマと取り組みかた

これまで六回にわたる日韓中合同セミナーの運営など、協会のなかで国際関連活動を担ってきたのが国際専門小委員会で、このたびその役割が強化・拡張されたものとして、新しい国際部会がスタートした。

思えば日韓から日韓中へと広がる四半世紀にも及ぶセミナー交流史に、昨今のグローバル化現象を重ねあわせると、これはもう協会組織にあって必然的な誕生かもしれない…、という手前ミソな自信の一方で、さて何からどう手をつけたらいいのかという広漠感がないわけでもない。当面の活動の柱は、合同セミナーの企画と運営になるだろう。これは揺るがせにできない仕事である。また過去のセミナーの中身を検証して、版権ビジネスなど「出版の国際化」を意識しながら、各出版部にもフィードバックできる業務モデルのようなものが模索できればよいとも考えている。

次にもう少し将来の話としては、三国以外のアジアの大学出版部や、AAUPなど欧米の大学出版部との交流の土壌作りをどうしていくか、がある。それも基本は、人間の交流にとどまらず、版権など「出版の交易」を意識すべきであろう。もちろん目的物はたやすく樹上から落ちて手に入るとは思われぬ。が、新生国際部会の「国際」の意味は、抽象的なものではなく、実質の形が見えるようにしてこそ、新時代に相応しい役柄となるはずである。以上、第一回国際部会に提示された「二〇〇三年度国際部会活動計画（案）」に沿ってまとめてみた。

（専修大学出版局・国際部会副部会長　笹岡五郎）

電子部会のめざすこと

日本大学出版部協会では、この四月にウェブサイト運営委員会を発展解消して、電子部会を新たに構成した。IT部会、電子出版部会、などいくつか名称の候補は挙がったが、なかなか決まらず、電子部会となった。この名称の落ち着きのなさが、電子部会の扱う課題の拡がりを示している。

日本大学出版部協会ウェブサイトを立ち上げたのが、一九九八年である。その当時は、まだウェブサイトは八大学出版部でしか開設されていなかった。いまやウェブサイトなしには学術出版の営業販売は考えられなくなっている。しかし、一方で欧米の動向を見ると、学術コミュニケーションの形態が、紙の本から電子媒体に大きく変わりつつある。日本においても、学術出版のあり方を再検討する必要に迫られている。そこで電子部会の第一の活動目標はEbookなど電子メディアによる学術出版の実験を開始することである。

さらにインターネットが教育環境、方法を大きく変えつつある現状がある。これまで大学などの講義録、教科書を出版活動の柱としてきた大学出版部のあり方を見直さなければならない。第二にEラーニングの実情と課題を研究し、インターネット環境での教科書のあり方を検討する。第三にメールマガジンの機能を有効に用いて、日本大学出版部協会の広報としての機能を強化する活動をすることである。

日本大学出版部協会のメールマガジンをぜひご購読いただき、電子部会の活動にも関心を持っていただければ幸いである。

（聖学院大学出版会・電子部会部会長　山本俊明）

（URL　http://www.ajup-net.com/）

関西支部の発足

先ごろ行われたAJUP二〇〇三年度通常総会で、関西支部の設置が正式にきまった。渡辺幹事長時代になって次々に打ち出された改革の一環というところだろう。あろうことか、私がその初代支部長に任じられた。その運営構想やいかに、というのがこのコラムの小稿に与えられたテーマである。

関西地区には、現在五大学出版部がある。当初、中部地区も含めて七大学出版部でのスタートが考えられていたらしいが、やはり地域的なまとまりということから、とりあえずは五大学出版部で始めたいと思う。中部二大学出版部には、課題などにより適宜オブザーバー参加をお願いしてはどうかと考えている。

まずは、現場でのお互いの顔を知ることからであろう。これまでは、それぞれが総会や年末懇親会で、あるいは夏期研修会で会っているだけであった。そこで、それぞれの大学出版部を訪ね合うことを一つの目標にして、巡回支部会を年三回程度やってみたい。少なくとも今年度は、「支部活動」らしき大風呂敷は広げず、お互いの足許を確かめ合う程度にしておきたい。

とりあえずは、AJUPが取り組むべきスタンダードな共通課題に、ささやかな事例や対応策をもちより、東京では「よう喋らん」レベルで親しく対話できればよいのではないか。

支部といってもたった五つである。「共同」するには、あまりにも規模が小さい。圧力を形成する力など最初からない。だからそういう目標を先送りしようというのではない。夢は夢として保持しておこう。

私が密かに思っている共通課題は、自らも含めて組織基盤の強化である。これは、経営そのものに絡むから、協会レベルをはるかに越えてしまう問題である。新しい出版会が関西に誕生することもうれしいが、より以上に現存の出版会の組織強化が望まれる。それが「喋り」で、突破口の一つや二つ開けられないものだろうか。

小野利家
（京都大学学術出版会）

成り行きにまかせて

二〇〇三年、大学出版部協会は「日本大学出版部協会」という名称で、四十周年を迎える。個人的な経緯を言えば、最初は上司の命ずるままに協会夏季研修会の末席に連なり、つわもの先輩の難しい議論を遠巻きに聞きながら、一九八二年からは「日本生命財団出版助成」の担当者として参加して原価計算と申請書類作りに悪戦苦闘し、一九九八年からは国際担当幹事として三カ国セミナーの運営に四苦八苦、いつの間にか大学出版部協会とは二十年の関係ができたことになる。単なる成り行きで、何故二十年間も協会との関わりが保てたのか我ながら不思議である。

知り得る範囲で振り返えれば、大学出版部協会は、各部会、幹事会共に単なる集合体であるように見えてそうであったことは一度もなく、常に意志と方向性を持った運動体として機能してきたことに気がつく。営業部会の「図書館納本制度」「国際ブックフェア」、刊行助成部会の「全国私立大学助成制度調査」、編集部会の機関誌「大学出版」の編集、ウェブサイト委員会の「協会ウェブサイト」などはその目に見える成果であり、大学出版部協会の意思力と方向性の中で「成り行きの二十年間が過ぎたのだ」という至極単純な理由があったことに気が付く。

二十一世紀の協会活動はその意思力と方向性がより明確化して加速度を増しそうな気配である。渡辺幹事長に至っては「バーチャルな、しかしあり得る近未来」という文章で「五〇大学出版部によるAJUP年次総会」を描いている。その赫々たる戦果は「維持的活動」と「創造的活動」の積み重ねによって実現するらしい。遠大であるが「あり得る近未来」はそこから始まるのだろう。新設国際部会の部会長としては「成り行きの奥を深めて」国際部会の「意思力と方向性」を「創造的活動」まで高めてみるか、と、またもや成り行きに乗ってしまいそうだ。

三浦義博
（東海大学出版会・日本大学出版部協会国際部会長）

日本大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会
060-0809 札幌市北区北９条西８丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

東北大学出版会
980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会
301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

聖学院大学出版会
362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会
277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部
158-0082 世田谷区等々力 6-37-12
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804

専修大学出版局
101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学４号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

大正大学出版会
170-8470 豊島区西巣鴨 3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部
194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部
192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会
151-0063 渋谷区富ヶ谷 2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会
113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局
102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会
105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル３Ｆ
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部
191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会
464-0814 名古屋市千種区不老町１名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会
514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会
606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会
565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会
662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-5233（内線 3475） FAX 0798-53-9592

九州大学出版会
812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版 五七号（二〇〇三年夏）二〇〇三年六月一日発行 頒価一〇〇円（〒共）発行所＝日本大学出版部協会 ISSN 0913-3305
〒一一三―八六五四 東京都文京区本郷七―三―一 東大構内 東京大学出版会内 電話〇三（三八一二）二一一一（内線八七九五五）E-MAIL：mail@ajup-net.com URL：http://www.ajup-net.com/